令和７年度
神戸大学大学院保健学研究科附属
アジア健康科学フロンティアセンター
活動報告書

神戸大学大学院保健学研究科附属
アジア健康科学フロンティアセンター

目次

１.2025 年度委員 3

２.はじめに 4

３.部門別活動報告 5

１） グロース&ディベロップメント部門 6

２） ヘルスリテラシー部門 8

３） インフェクシャス・コントロール部門 11

４） サクセスフル・エイジング部門 14

４．セミナー開催実績 20

1．2025 年度委員

センター所属部門等	氏名	職	領域
センター長	グライナー　智恵子	教授	看護学
副センター長	亀岡　正典	教授	パブリックヘルス
グロース&ディベロップメント部門長	西村　範行	教授	パブリックヘルス
グロース&ディベロップメント部門	法橋　尚宏	教授	看護学
	松井　三明	教授	パブリックヘルス
ヘルスリテラシー部門長	和泉　比佐子	教授	パブリックヘルス
ヘルスリテラシー部門	中澤　港	教授	パブリックヘルス
	野田　和惠	教授	リハビリテーション科学
インフェクシャス・コントロール部門長	亀岡　正典	教授	パブリックヘルス
インフェクシャス・コントロール部門	山下　公大	教授	病態解析学
	入子　英幸	准教授	パブリックヘルス
	大﨑　博之	准教授	病態解析学
サクセスフル・エイジング部門長	グライナー　智恵子	教授	看護学
サクセスフル・エイジング部門	長尾　徹	准教授	リハビリテーション科学
	山口　裕子	准教授	看護学
	菅　彩香	助教	看護学

２.はじめに

アジア諸国・地域では、感染症対策、母子保健、生活習慣病、高齢化への対応など、ライフステージを通じた多様な保健衛生課題への対応が求められています。こうした課題の解決に向けては、個々の課題に対応するだけでなく、各ライフステージに応じた切れ目のない（シームレスな）支援を可能とするヘルスケアシステムを構築していくことが重要です。保健学研究科では、これまで学部教育・大学院教育ならびに研究活動を通じて、ベトナム、インドネシア、フィリピン、タイ、台湾をはじめとするアジア諸国・地域の大学・研究機関等との連携を進め、保健・医療専門職および健康科学分野を担う教育・研究者の育成、国際共同研究を推進してきました。アジア健康科学フロンティアセンターは、こうした実績と国際的なネットワークを基盤として、アジア地域が抱える多様な保健衛生課題の解決に貢献することを目的に活動しています。

本センターには、少子化・母子保健課題に対応する「グロース&ディベロップメント部門」、生活習慣病や高齢社会に対応する「サクセスフル・エイジング部門」、感染症に対応する「インフェクシャス・コントロール部門」、保健衛生課題の解決策の社会実装・社会基盤化に取り組む「ヘルスリテラシー部門」の 4 部門を設置しています。2025 年度においても、各部門の専門性を生かした教育・研究活動を展開するとともに、国内外の大学・研究機関等との連携を通じて、国際共同研究や学術交流を推進しました。

本報告書では、2025 年度における各部門の活動状況および研究成果を取りまとめています。今後も、これまで培ってきた国際的なネットワークと多様な専門領域の強みを生かし、アジア地域の人々の健康と Well-being の向上に資するヘルスケアシステムの構築に貢献してまいります。

３.部門別活動報告

(1)研究概要と令和７年度の成果

(2)研究業績等

氏名．タイトル，雑誌名，巻（号），発行年（学会発表の場合は発表年月）.

① 学術論文

② 著書

③ 報告書・その他

④ 学会発表・講演

⑤ 科学研究費補助金の獲得状況

【代表】

科研種類、タイトル、代表者名、期間全体の直接経費（R7 年度の直接経費）

【分担】

科研種類、タイトル、分担者名、期間全体の分担直接経費（R7 年度の分担直接経費）

⑥ その他補助金・助成金の獲得状況

⑦ 受託研究・共同研究・受託事業・奨学寄附金の獲得状況

⑧ 受賞・表彰

⑨ 地域連携プロジェクト・産官学共同プロジェクト

⑩ 招へい外国人研究者

１） グロース&ディベロップメント部門

（１）研究概要と令和７年度の成果

安心して子どもを産み育てられる社会の実現を目指して、以下の活動を行った。

①カンボジアにおける新生児の成長追跡調査

カンボジアにおける新生児の死亡は近年大幅に減少しているが、同国では定期的なフォローアップ体制がないために、生まれてまもなく新生児室での治療を受けて退院した子どもの予後は明らかではない。本研究では、国立母子保健センター（首都プノンペン市）の新生児室を退院した児をコホートに組み込み、2 歳までの①発育と発達、②発生する病気と障害の割合を明らかにするとともに、低中所得国で実施可能なフォローアップ体制のありかたについての提言を行うことを目的として実施する。初年度である令和７年度は、コホート形成の前段階として、退院後に生存している児がどのような医療的ケアを要しているのか、またそれに伴う家族の負担についての質的調査を実施した。結果は現在整理を行っており令和８年度中に公表予定である。

②カンボジアにおける乳児の発育状態と栄養方法

グローバルヘルス領域では「生後６ヶ月までの乳児に母乳以外のものを与えると、その後の成長に悪影響を及ぼす」ことが通説となっており、そのために一定期間の完全母乳育児が推奨されている。しかし多くの低中所得国では水、果汁、スープ、粥などを生後 1-2 ヶ月の早期から与えることが多く、結果として完全母乳育児率は低い。一方で、保健医療の発達によって子どもの死亡率は着々と低下してきている。そこで本研究は、完全母乳、混合、母乳なし、それぞれ異なる栄養方法で育つ子どもの発育への影響を提示し、栄養指導の課題を明確にすることを目的に実施する。初年度である令和７年度は、十分数の研究参加者を得るための調査対象地選定、倫理承認および研究実施許可の取得を行った。令和８年度より研究参加者登録と追跡を実施する。

（２）研究業績等

① 学術論文

1. Takatani S, Nakaguchi H, Honda J, Soejima T, Kitao M, Lin Q, **Nishimura N**. Effects of Respite Care on the Quality of Life of Caregivers of Children With Autism Spectrum Disorder in Comparison With Parent Training: A Systematic Review and Meta-Analysis. ***Cureus*** 2026, 18: e101377.

2. Nakaguchi H, Honda J, Takatani S, Lin Q, Kitao M, Soejima T, **Nishimura N**. Health-Related Quality of Life Among Siblings of Children with Special Needs and Typically Developing Children in Japan: A Cross-Sectional Study. ***J Sch Nurs***. 2025,

10598405251333293.

3. Lin Q, Soejima T, Zhang S, Nakaguchi H, Takatani S, Honda J, Hohashi N, **Nishimura N**. Social Capital and Family Well-Being Among Immigrant Chinese and Native Japanese Families Raising Children in Japan: A Cross-Sectional Study. ***Healthcare.*** 2025; 13: 1518.

4. Hirakawa E, Tokumasu H, Vorlasane L, Bah AB, Hokuto I, Seimiya A, Morita M, **Matsui M**. Study protocol of "A preterm infant life-saving package including a simple and affordable incubator and a portable flow generator mask-CPAP in resource-limited settings" SAVE preterm trial, saving preterm infants by adopting vital equipment. ***BMC Pediatr***. 2025;25(1) :763.

⑤　科学研究費補助金の獲得状況

【分担】

1. 松井三明（分担）. 科学研究費助成事業. 基盤研究(C). カンボジアの病的新生児コホート研究：死亡対策から健やかな成長への変革に向けて. 研究代表者 岩本あづさ. 2025 年度～2028 年度.
2. 松井三明（分担）. 科学研究費助成事業. 基盤研究(C). 低中所得国における乳児の発育状態と栄養方法の関連. 研究代表者 寺岡春菜. 2025 年度～2027 年度.

２） ヘルスリテラシー部門

（１）研究概要と令和７年度の成果

①インクルーシブキャンパス&ヘルスケアセンター ジェンダー平等推進部門と連携したユネスコ・チェアプロジェクト（Gender and Vulnerability in Disaster Risk Reduction Support）

ユネスコチェアとは、知の交流と共有を通じて、高等教育機関および研究機関の能力向上を目的とするユネスコの認定プログラムであり、大学間のネットワークを形成し、国境を越えた教育・研究活動を通し、知識の交換を促すことを目指している。神戸大学ユネスコチェアの第２期（2022 年－2025 年）はジェンダー、脆弱性、ウェルビーイングを中心に据えた減災対策ジをテーマにに実施されている（事業期間は４年間）。本事業は、パートナー機関であるインドネシア・ガジャマダ大学、マレーシア・トゥンクアブドールラーマン大学、タイ・タマサート大学、台湾・高雄科技大学等との協働により進められている。保健学研究科は、国際人間科学部、国際文化学部、発達科学部、海事科学部、国際協力研究科等とともに、「教育プログラム」に参画した。2025 年度は 12 月 6 日～7 日にオンラインで開催され、神戸大学から 17 名、 ガジャマダ大学（インドネシア）10 名、 トゥンクアブドゥルラーマン大学（マレーシア）5 名、 高雄科技大学（台湾）9 名、 メーファールアン大学（タイ）14 名、シファタミールエミラット大学（パキスタン）12 名の学生が参加しました。また、ファシリテーターとしてメーファールアン大学２名、ガジャマダ大学１名、 神戸大学１名、教員は６大学から計 19 名が参加した。今年度のテーマ「一緒に減災に取り組もう～安全・安心を私たちから発信しよう」のもと、前半は各国の現状についてのプレゼンテーションがあり、内容について活発に議論が展開されました。当番校のメーファールアン大学によるパネルディスカッション等も行われた。各国の報告から国によって災害の実態や対応の相違やジェンダーや脆弱性に注目する重要性の理解につながった。

②外国人居住者の医療のヘルスリテラシーに関する研究

日本における外国人患者に対する作業療法の現状と作業療法士が認識する困難およびその関連要因を明らかにすることを目的に、調査を行い外国人患者（中国、アメリカ、フィリピン、ブラジル、ベトナム国籍者）への作業療法セッション中に感じた困難と言語の違いの間には有意な関連性が認められ、経験年数、海外経験などの要因も影響していた。一方、文化、習慣、偏見の違い、翻訳アプリの利用可能性などの職場リソースも認識された困難とは関連していなかった。個々の患者の価値観やライフスタイルを理解することで、作業療法士は文化や習慣の違いを障壁と捉えることなく適応できる可能性が示唆された。

③コロナ禍におけるインターネット情報のリンク切れの課題

コロナ禍において、日々更新される感染者数や死者数に関する公式統計、政策決定を報じる国際機関や政府機関、世界各地の社会的状況を報じるマスメディア、研究成果を報告するプ

レプリント、ほぼオープンアクセスで公開された論文に至るまで、インターネット情報は極めて重要な役割を果たした。しかし、2 つの大きな問題が信頼できる情報源としてのインターネットの問題点を浮かび上がらせたことも事実である。1 つはインフォデミックで、もちろん旧来のマスメディアや口コミでも起こっていたが、SNS の普及により、誰でも容易に情報の発信や輻輳が可能になったため、恐ろしい速度で誤情報が拡散するようになった。しかも互いに似た政治経済的スタンスを持つ人たちが互いの SNS アカウントをフォローし、間違った情報でも仲間が同意してくれることによって強固な信念となってしまうエコーチェンバーや、プッシュ型の SNS メディアが受け手の好ましく思う情報だけを選択的に届けることで、一面的な情報だけが仲間内にはまん延し、不都合な情報は入ってこないフィルターバブルといった特性によって、より先鋭化し尾ひれが付いていくことを指摘した。

④地域住民のヘルスリテラシー向上に関する研究

地域在住高齢者のヘルスリテラシー向上のため、社会活動とその関連要因を明らかにすることを目的に調査を行い、社会参加・奉仕活動をしていることは社会活動を一緒にする仲間がいる、地域の掲示板を閲覧する、中年期における地域との関わりがある、利用可能な社会参加・奉仕活動の場が多い、特性的自己効力感が高いことと有意に関連していた。学習活動をしていることは、利用可能な学習活動の場が多い、活動情報を認知していることと有意に関連していた。中年期からの地域とのつながりの促進や仲間づくりの支援、社会活動の場の充実、活動情報の周知が社会活動への参加を促進する可能性が示唆された。

地域在住高齢者の平常時からの防災行動としての保健行動の実態と地域とのつながりなどの関連要因を明らかにすることを目的に調査を行い、平常時に内服薬の携帯している高齢者は16.1%と少ないことが明らかとなった。病気を抱えながら暮らす地域住民とかかりつけ医などの医療機関が連携を取り、有事にも備えられるような取り組みを行うことが必要である。また、普段から家族や近隣住民と地震に対する話題をあげるという情報共有が防災行動において重要であることも明らかとなった。

（2）研究業績等

① 学術論文

1.Akane Katsuda, **Kazue Noda**. Factors Influencing the Perceived Difficulties of Occupational Therapists in Japan When Treating Foreign Patients. Journal of international society of clinical medicine、9(1), 47-55, 2025.

③ 報告書・その他

1.中澤　港、新型コロナウイルス感染症のパンデミックをめぐる資料、記録、記憶の保全と継承──「何を、誰が、どう残すか」を考える・05 コロナ禍におけるインターネット情報のリンク切れとその保存、公衆衛生、89 巻、2025 年、pp.459-462

④　学会発表・講演

1.中澤　港、インターネット上の健康関連情報のリンク切れ問題：COVID-19 を例にして、日本健康学会第 90 回総会、2025 年

2.木内麗奈、和泉比佐子、内村利恵．大都市に住む一人暮らし男性前期高齢者の社会活動とその関連要因．第 14 回日本公衆衛生看護学会学術集会、2025 年 12 月．

⑤　科学研究費補助金の獲得状況

【分担】

1.基盤研究(A)、COVID-19 のパンデミックへの歴史学的「介入」―歴史化のための記録と記憶の保全、中澤　港、150 万円（30 万円）

３） インフェクシャス・コントロール部門

（１）研究概要と令和７年度の成果

デングウイルスの複製機構に関与するヒト細胞遺伝子の探索研究、B 型肝炎ウイルスの複製を阻害する新規抗ウイルス物質の探索研究や抗ウイルス活性物質の作用機序に関する研究、新規抗ウイルス薬剤の探索に役立つ組換え型レポーターデングウイルスの開発研究、細胞表面抗原を認識して遺伝子導入が可能となるレンチウイルスベクターの開発研究などについて基礎研究を実施した。また、工学研究科との共同研究により、インフルエンザウイルス H1N1（エンベロープウイルス）およびコクサッキーウイルス B3 型（非エンベロープウイルス）を不活化する新規の光触媒の開発研究を実施した。さらにインドネシアの研究グループと国際共同研究を実施して、HIV/AIDS 治療開始後も免疫が回復しない「免疫学的非応答者」の原因を解明するための臨床的研究やデング重症化を規定する宿主因子の探索研究を行った。また、HBV カプシド形成阻害剤の開発研究では、中国山東大学との共同研究により、GLS4 のコア構造を基盤とした新規誘導体を設計・合成し、これらの誘導体において HBV cccDNA 形成阻害活性があることを見出した。これらの研究内容の一部を纏めた論文報告に関与した。

（２）研究業績等

① 学術論文

1 .Osawa K, Nomoto R, Suzuki T, Maeda T, Ganesh R, Kinoshita S, Nakanishi N, Raharjo D, **Kameoka M**, Fujisawa M, Rai SK, Kuntaman, Shirakawa T. Survey of Antimicrobial-Resistant Bacteria Isolated from Rivers in Japan, Indonesia and Nepal. Pathogens 15:317, 2026.

2.Rachman BE, Supranoto YTN, Iskandar SI, Asmarawati TP, Khairunisa SQ, Arfijanto MV, Hadi U, Miftahussurur M, Nasronudin, **Kameoka M**, Rahayu RP, Hidayati AN. Defining and Predicting HIV Immunological Non-Response: A Multi-Definition Analysis from an Indonesian Cohort. Viruses 17:1581, 2025.

3.Yagi M, Takegawa N, Churrotin S, Amarullah I-H, Aoki-Utsubo C, **Kameoka M**. Search for host factors involved in flavivirus life cycle. Bulletin of health sciences Kobe 41:3-22, 2026.

4.Shiroma H, Chikamoto A, **Kameoka M**, Kumagai K, Matsuyama H, Ichihashi Y. Antimicrobial and antiviral activities and reaction mechanisms of an organic photocatalyst upon visible-light irradiation. Res. Chem. Intermed. 51:2591-2604, 2025

③　報告書・その他

1.靱千恵, **亀岡正典** 肝炎ウイルスの増殖を制御する薬用植物成分の探索研究 BIO Clinica　これからの肝疾患診療 12 月号. 2025

④　学会発表・講演

1.**亀岡正典**, HIV-1 インドネシア株の分子疫学的解析, 第 38 回近畿エイズ研究会学術集会 2025 年 6 月 京都

2.靱千恵, Shuo Wang, 佃美由香, 堀田博, Peng Zhan, **亀岡正典**, B 型肝炎ウイルスカプシド集合阻害剤 GLS4 を基盤とした誘導体の合成と活性評価, 第 72 回日本ウイルス学会学術集会　2025 年 10 月　静岡

3.Dian Eka Ermawati, Misaki Yagi, Chie Aoki-Utsubo, Shuhei Taguwa, Yoshiharu Matsuura, **Masanori Kameoka**, Development of Recombinant Dengue Virus Possessing a Small Reporter Tag, 第 72 回日本ウイルス学会学術集会　2025 年 10 月　静岡

4.田中真央, 靱千恵, **亀岡正典**, HIV-1 感染細胞特異的ウイルスベクター作製に向けたウイルス外被タンパク質設計とその発現評価, 第 72 回日本ウイルス学会学術集会　10 月　静岡

5.靱千恵, 堀田博, **亀岡正典**, Butyrolactone I による B 型肝炎ウイルス感染阻害機構の解析, 日本薬学会第 146 年会　2025 年 3 月　大阪

6.Dian Eka Ermawati, Misaki Yagi, Chie Aoki-Utsubo, Shuhei Taguwa, Yoshiharu Matsuura, **Masanori Kameoka**, Development of Recombinant Dengue Virus Serotype 2 Possessing a Small Reporter Tag using a bacterial-free, circular polymerase extension reaction, 日本薬学会第 146 年会　2025 年 3 月　大阪

⑤　科学研究費補助金の獲得状況

1.基盤研究(C)、B 型肝炎カプシドタンパク質を標的とした新規阻害剤の創製と性状解析に関する研究、2025-2027 年度、亀岡正典（研究分担者）、600 千円（200 千円）

⑥　その他補助金・助成金の獲得状況

1.国立研究開発法人日本医療研究開発機構、新興・再興感染症研究基盤創生事業「インドネシアにおける新興・再興感染症の国際共同研究拠点形成に関する研究」2020-2026 年度、亀岡正典（研究分担者）、53,000 千円（R7 年度の分担直接経費 8,000 千円）

４） サクセスフル・エイジング部門

（１）研究概要と令和７年度の成果

今後急速に高齢化が進むアジアの国・地域の研究者と協働しながら、特に認知症高齢者とその家族介護者が、できるだけウェルビーイングを保ちながら在宅での生活を継続できるための支援システム構築に向けて、AI などの工学技術を活用した研究に取り組んでいる。令和７年度は、日本と台湾での研究成果をまとめるとともに、支援プログラム開発に向けた文献レビューを実施した。また、Aging-in-place technologies の発展に向けたワークショップへ参加し、看護における Gerontechnology の課題等について検討した。
高齢者糖尿病における骨格筋低下（サルコペニア）と生活習慣・栄養との関連に関する研究では、特に縦断的ビッグデータや AI 解析、ライフログデータを用いて、骨格筋低下を引き起こす要因の解明と予防介入モデルの構築を進めている。

発酵食品の匂いが嗜好と食行動に与える影響に関する研究では、日本人と内モンゴル人を対象に、食品の匂いに対する主観的評価と脳波データを収集・分析した。この調査では、食品の受容プロセスを理解し、健康的な食生活の推進に寄与することを目指している。また、高齢者のより個別性の高い転倒リスク評価指標の開発を目指して、筋力、運動機能、皮膚感覚等のデータ分析を進め、国内学会、国際学会にて成果報告を行った。

（２）研究業績等

① 学術論文

1. Fritz R L, Dermody G, Masaki H, **Greiner C**, Atakro C A, Mohammadi M, Van Son C. A Global Gerontechnology Center for Nursing Science for improving aging-in-place technologies. Nursing outlook, 73 (6), 2025. DOI: 10.1016/j.outlook.2025.102590

2. Ryuno H, **Greiner C**, **Yamaguchi Y**. Effect of remote meetings on the well-being of people with dementia living in a nursing home: A mixed-method study. Geriatric Nursing, 65, 2025. DOI: 10.1016/j.gerinurse.2025.103496

3. Ryuno H, Mukaihata T, Takemura T, **Greiner C**, **Yamaguchi Y**. Application of artificial intelligence to electronic health record data in long-term care facilities: a scoping review protocol. 1 BMJ Open, 15 (7), 2025. DOI:10.1136/bmjopen-2024-098091

4. Mukaihata T, **Greiner C**, Ishida E, Fujimoto H. Relationship between emotional intelligence, patients' positive reactions toward nurses, and work engagement among mental health nurses: A cross‐sectional study. Japan Journal of Nursing Science, 23 (2), 2026. DOI: 10.1111/jjns.70046

5. Tong Z, Chen S, **Yamaguchi Y**, Nakamura M, Yen H, Lee S. Assessing Elderly Physical Health Using Motor Function Variability and Bayesian Regression. IEEE/ACIS SNPD 587–592, 2025.

6. Tong Z, Chen S, **Yamaguchi Y**, Nakamura M, Yen H, Lee S. Vision-Based Assessment of Skeletal Muscle Decline. Healthcare 13(12), 1405, 2025.

7. Miura T, Watanabe A, Miyake M, **Suga S**, Miyoshi M, Miyashita K, Komatsu S, Nishimura N, Shimizu K, Hori Y. Novel orthotopic patient-derived xenograft model using human pancreatic cancer tissue fragments to recapitulate distant metastasis and cancer-related hypercoagulability. Medical Molecular Morphology, 58(3), 2025.

8. Arimoto N, Tan C, Tamei T, Tajika R, Yoshimi T, Fukushige H, **Suga S**, Ishida T, Ishii A, Shiotani H. Differences in the circadian rhythm of heart rate between nurses engaged in rotating night shift work and those in day-only work: A three-month monitoring study. Biological Rhythm Research, 57(6), 2025.

② 著書

1. 共著（**グライナー智恵子**）、老年医学 下　第 2 版　基礎研究から実地診療まで, 日本臨床社、2025

2. 共著（**グライナー智恵子**）、日本老年看護学会編：認知症看護スタンダード, 照林社, 2025.

③ 報告書・その他

1. **Suga S**, Yoshimura S, Ohono Y. Factors Influencing the Skin Sensation of the Index Finger in Older People: Impact of Antihypertensive Medications, Studies in Health Technology and Informatics. 2025. Aug 7; 329:1740-1741, 2025.

④　学会発表・講演

1. Aiko Ito, Sonoko Kabaya, **Chieko Greiner**. Effects of 40 Hz auditory stimulation on cognitive function in older adults with mild cognitive impairment: A systematic review.　The 28th EAFONS, 2025 年 2 月

2. Chaowarit Ngernthaisong, Sonoko Kabaya, Uraporn Chuaykarn, **Chieko Greiner**. Technology Interventions Reducing Stress and Burden in Family Caregivers of People with Dementia: A Systematic Review. The 28th EAFONS, 2025 年 2 月

3. Hirochika Ryuno, Tsuyoshi Mukaihata, Tadamasa Takemura, **Chieko Greiner**, Yuko Yamaguchi. Utilization of Electronic Health Record Data Using Artificial Intelligence in Long-term Care Facilities: A Scoping Review.　The 28th EAFONS, 2025 年 2 月

4. Aiting Shi, **Chieko Greiner, Yuko Yamaguchi**. Nurses' Perceptions of Physical Restraint of Older Patients with Dementia in General Hospitals and Related Factors.　The 28th EAFONS, 2025 年 2 月

5. Yi Huang, **Chieko Greiner, Yuko Yamaguchi**. Factors Associated with Dementia Worry Among Older People Living in the Community, The 28th EAFONS, 2025 年 2 月

6. 岡本菜穂子, 加瀬竜太郎, **グライナー智恵子**, 中村匡秀. 認知症高齢者の家族介護者のストレス—Virtual Agent の影響に焦点を当てた混合研究. 第 11 回日本混合研究法学会年次大会国際混合研究法学会(MMIRA), 2025 年 11 月

7. Tong Z, Chen S, **Yamaguchi Y,** Nakamura M, Yen H, Lee S. Assessing Elderly Physical Health Using Motor Function Variability and Bayesian Regression, The 30th IEEE/ACIS International Summer Conference, 2025 年 7 月

8. **山口裕子**, 陳思楠, 小野くみ子, 山田暢子, **グライナー智恵子**, 中村匡秀, 龍野洋慶. 地域在住高齢者における骨格センシングを用いた身体機能測定評価の有効性. 日本老年看護学会第 30 回学術集会, 2025 年 6 月

9. **Yuko Yamaguchi**, Sinan Chen, Kumiko Ono, Masako Yamada, **Chieko Greiner,**

Masahide Nakamura, Hirochika Ryuno. Evaluation of physical function using Pose estimation in Japanese community dwelling older adults. ICN Congress, 2025 年 6 月

10. Hirochika Ryuno, Tsuyoshi Mukaihata, Tadamasa Takemura, **Chieko Greiner**, **Yuko Yamaguchi**. Application of Artificial Intelligence to Electronic Health Record Data in Long-term Care Facilities: A Scoping Review. 15th INC & 28th EAFONS 2025 2025 年 2 月

11. 横谷升美, 竹村匡正, 松川未来, 門野勇介, 山下晃平, **山口裕子**, **グライナー智恵子**, 龍野洋慶. オンプレミス型大規模言語モデル（LLM）を用いた高齢者施設入所者の DBD13 推測の可能性の検証. 第 53 回日本 M テクノロジー学会大会, 2025 年 10 月

12. 龍野洋慶, 向畑毅, 竹村匡正, **グライナー智恵子**, **山口裕子**. 高齢者施設における AI を用いた電子カルテデータの利活用：スコーピングレビュー. 第 45 回医療情報学連合大会（第 26 回日本医療情報学会学術大会, 2025 年 11 月

13. 横谷升美, 竹村匡正, 松川未来, 門野勇介, 山下晃平, **山口裕子**, **グライナー智恵子**, 龍野洋慶. オンプレミス型大規模言語モデル(LLM)を用いた高齢者施設入所者の well-being 推測および内的妥当性の検証. 第 45 回医療情報学連合大会（第 26 回日本医療情報学会学術大会), 2025 年 11 月

14. 松川未来, 竹村匡正, 横谷升美, 門野勇介, 山下晃平, **山口裕子**, **グライナー智恵子**, 龍野洋慶. 大規模言語モデルを用いた介護ケアプランの生成と更新. 第 45 回医療情報学連合大会（第 26 回日本医療情報学会学術大会), 2025 年 11 月

15. **菅彩香**, 吉村眞一, 大野ゆう子. 高齢者の示指の皮膚感覚に影響を与える要因の検討：降圧剤の影響－転倒予防への貢献を目指して－, 日本老年看護学会第 30 回学術集会, 2025 年 6 月.

16. 外池光雄, 吉村眞一, 矢野忠, 古川龍三, 大野ゆう子, **菅彩香**, 曽智, 田村かおり, Jeong Hieyong, 坂上友介, 梅田雅宏, 永田宏子, 種村麻里, 越野八重美, 寺田昌史, 草川祐生, AJISAIHAN. 「特定の周波数の振動が体性感覚、嗅覚の認知に影響する」「嗅覚刺激が体性感覚、認知反応に影響する」などの発見について, 第 24 回日本 VR 医学会学術大会, 2025 年 8 月.

17. **Chieko Greiner.** Enhancing the well-being of people with dementia and their family caregivers taking advantage of technology. Building a Global Gero Center for Nursing Science: Community Event & Workshop, 2025 年 3 月

18. 笹沼里味, 田内悠太 , 坂本敏行 , 小南陽平 , **長尾徹**. 兵庫県作業療法士会 「高齢者安全運転健康教室」事業について, 第 59 回日本作業療法学会、2025 年 11 月.

⑤ 科学研究費補助金の獲得状況

【代表】

1. 基盤研究（B)、環太平洋アジア地域における AI を活用した認知症家族介護者支援システムの構築と検証、グライナー智恵子（研究代表者)、14,500 千円（3,400 千円）

2. 若手研究、高齢糖尿病患者における骨格筋低下予防のための栄養介入支援モデルの構築、 山口裕子（研究代表者)、3,500 千円（1,100 千円 ）

3. 若手研究、生体計測によるロコモティブシンドロームを有する者の運動器の状態の個別性の可視化、菅彩香、360 万（70 万）

【分担】

1. 基盤研究（A)、Healthy Memory Twin: 自分のデータで記憶障害に備えるスマートシステム、グライナー智恵子（研究分担者)、2,650 千円（700 千円）

2. 基盤研究（B)、XAI 技術を活用した手指巧緻性評価による認知症早期支援システム開発、グライナー智恵子（研究分担者)、1,200 千円（300 千円）

3. 基盤研究（C)、日本における生活困窮者のホームレス化予防のあり方に関する研究、グライナー智恵子（研究分担者)、700 千円（100 千円）

4. 基盤研究（C)、機械学習による高齢者施設の科学的介護情報システムの活用と Well-being 規定因子の解明、グライナー智恵子、山口裕子（研究分担者)、150 千円（50 千円）

5. 基盤研究(C)、認知に着目した高齢者に支援機器をマッチングさせる手法の研究、長尾徹（研究分担者)、1230 千円（10 千円）

⑥　その他補助金・助成金の獲得状況

1. 公益財団法人サッポロ生物科学振興財団　研究助成、発酵食品の匂いが嗜好と食行動に与える影響の日本とモンゴルの国際比較：脳活動と主観的体験の両面からの分析、菅彩香、A JISAIHAN、100 万

⑦　受託研究・共同研究・受託事業・奨学寄附金の獲得状況

1. 国立研究開発法人科学技術振興機構 国際科学技術基盤整備事業 SICORP、日本―台湾研究交流「AI システム構成に資するナノエレクトロニクス技術」、日本と台湾の糖尿病高齢者における工学技術を利用したサルコペニア予防のための栄養介入策の構築、山口裕子（研究代表者)、グライナー智恵子（研究分担者）非公開

2. 日本医療研究開発機構 AMED 予防・健康づくりの社会実装に向けた研究開発基盤整備事業　（エビデンス構築促進事業)、認知症予防を目指した多因子介入の長期効果と社会実装に向けた発展的介入の効果検証、山口裕子（研究分担者)、非公開

４．セミナー開催実績

日時	発表演題（発表者※１）
2025/6/11 18:30-20:30	・こどもの健康科学（西村教授） ・骨格筋分泌ベシクル（エクソソーム）による健康評価・管理（前重准教授） ・腫瘍学研究から健康科学をみる（山下教授）
2025/6/25 18:00-20:00	・認知症高齢者とその家族の well-being を目指して（グライナー教授） ・マクロからミクロまで網羅するウイルス感染症対策（亀岡教授） ・熱帯熱マラリア原虫の生殖母体感染赤血球表面の接着性タンパク質の同定（入子准教授）
2025/7/30 18:00-20:30	・座位行動を踏まえた包括的リハビリテーションの新たな視点（井澤教授） ・小児・ AYA がん経験者のサバイバーシップケアと QOL（副島准教授）
2025/9/24 18:00-19:00	・老化神経の修復促進と虐待メカニズム解明への取り組み（田中准教授）
2025/12/12 18:30-19:30	・染色体外 DNA(ecDNA)が誘導するがんのゲノム不均一性（金山准教授）
2026/3/3 18:00-19:00	・発達障害支援のためのペアレントトレーニングやソーシャルスキルトレーニングプログラムの開発（奥野教授）

※１　役職名は発表時点のものを記載しています